



紀州本川中島合戦図屏風（右隻 和歌山県立博物館蔵）天文23（1554）年の戦いで、武田軍を御船川に追いつめた上杉軍を描く

が合戦絵ですが、紀州本の合戦図屏風をよくながめてみると、上杉がたの中条越前守の荷駄隊に、合戦場に近い塩崎（長野市篠ノ井）の百姓たちが襲いかかっているではありませんか。これはいったいどうしたことでしょう。

太刀や弓・槍を手にして武士に切りかかっている塩崎の百姓たちのすがたは、戦乱のなかを逃げまどうすがたを想像しがちなわたしたちにとって、思いもよらない光景です。じつは戦場では百姓たちも生活のために戦っていたのです。たしかに百姓や職人が、武器や物資の輸送のために戦場にかりだされることはありましたが、それとは別に自らすすんで戦場にてかかっていったこともあったようです。つまり、戦場で入手できる武器や物資をあてこんでのことでした。奪い取った物は売りましたから、命がけとはいえ戦場は百姓たちにとって稼ぎの場でもあったのです。塩崎の百姓たちが夢中で荷を運び去っているのは、そんなようすを描いたものと思われれます。

越後（新潟県）の上杉謙信は、冬のあいだ雪の少ない関東へ何度も出兵していました。このとき、大勢の百姓たちが戦場へ稼ぎに出むいたといわれています。



(タテ109.2cm×ヨコ272.7cm)

冬の出稼ぎのはじまりといえるかもしれませんが。
◆戦乱の情景

戦国大名たちは相手をたおすために、しばしば恐ろしい手段を決行しました。相手の食糧を断つために、稲の穂が実るまえに刈り取ってしまうのがそのひとつです。これは刈田かりたとよばれています。相手の領地一帯に火をかけて焼き払ってしまうこともしばしばありました。放火によって寺院や百姓家などが灰になった例は、信濃ではめずらしくありませんでした。たとえば飯田の文永寺（飯田市松尾知久平）は武田氏に焼かれましたし、諏訪社も織田氏によって火をかけられました。

乱妨・狼藉らんぼうといつて、百姓が死傷の被害にあったり、食糧や物品が掠奪りやくたつされたり、身売りのうきめにあったりしたこともあります。戦国時代は武士だけでなく、民衆にとつても食うか食われるかの状況に追い込まれる世情だったのです。ですから、自分たちの身を自身で守るために武士なみの武力を持つことも必要でした。村の者が共同して村を守るための努力がはらわれたのです。ときには自分たちが逃げ込むための「村の城」もつくられたようです。

（樋口和雄）



川中島合戦図屏風（左妻 和歌山県立博物館蔵）弘治2（1556）年の戦いで、武田方本陣を夜襲し、火を放つ上杉軍を描く



上杉がたの荷駄隊を襲う塩崎の百姓



百姓たちも
戦っていたん
だねえ

なかなか
やりますねえ

善光寺と飯縄いひづな・戸隠修験とがくしゆげん



戸隠連峰表山(戸隠村観光協会提供)

◆山岳信仰と修験道

わが国では古くから、険しく高い山やまは神や死霊の住む、普通の人びとには近づきがたい聖地として意識されてきました。こうした日本古来の山岳信仰に加えて仏教が渡来すると、とくに密教の影響を受けて山中が修行の場所とされ、宗教活動がおこなわれるようになりました。平安時代にはじまった修験道は中世には全盛期を迎え、密教の修験者たちは験力を得ようと山岳修行に励んだのです。

◆戸隠山と信仰

戸隠山(現在の戸隠村)は、信州の代表的な信仰の山であり、修験者の活躍した場所です。平安末期の歌謡集である『梁塵秘抄』にも「四方の霊験所は、伊豆の走湯、信濃の戸隠、駿河の富士の山：(下略)」と歌われるほど、当時すでに有名な霊場になっていたことがわかります。平安末期から鎌倉時代には顕光寺といわれ、天台宗延暦寺の末寺とされています。

鎌倉時代のなかに、古記録を集めて編集した『阿婆縛抄』には、善光寺と並んで戸隠寺の縁起が収め



戸隠奥社本地仏であった聖観音菩薩坐像(長泉寺蔵)

られています。

これによると、九世紀のなかくろ学門行者が飯縄山で七日間祈念した後、独鈷(密教で使う仏具のひとつ)を投げて場所を占い、戸隠の岩戸を発見したといえます。そして、行者がここで法華経を唱えていると九つの頭をもつ一匹の竜が現れ、「自分はこの山の前の別当(管理者)であったが、欲張って信者のお布施をこまかしたために罰が当たり、このような姿になった。しかし、このたびあなたのお経によつて救われたのでこれからはこの山を守ってあげよう。」といい、岩屋に籠ったので、行者はその戸を封じ、そこに戸隠山顕光寺を建てたとされています。

『阿婆縛抄』のほか、室町時代に編纂された『戸隠山顕光寺流記』などにも、顕光寺についてのくわしい記述があります。はじめ、大岩屋前の本院(現在の奥社)に開かれた戸隠山には、一一世紀後半に福岡院(現在の宝光社)や中院(現在の中社)が相次いで建てられたと記されています。それぞれの門前には多くの院坊(参詣社のための宿舎)があつたことも伝えられました。これらの記述を裏付けるように、一九六三年から七一年におこなわれた戸隠山総合学術調査によ

戸隠奥社参道付近図
(院坊の配列を示す)



『戸隠一総合学術調査報告』(信陽書籍印刷1971)より転載



戸隠神社と奥社参道杉並木 (戸隠村観光協会提供)

って、現在の奥社参道には立派な講堂跡や一〇あまりの院坊跡が確認されました。戦国時代の資料には、本院一九坊、中院三四坊、宝光院二七坊の名が記されていて、中世の戸隠山の繁栄がうかがえます。

◆戸隠と善光寺

鎌倉時代なごころまでの戸隠は、修行の山でありました。鎌倉時代の後半になると善光寺信仰の隆盛とともに天台宗の信仰者だけでなく、ほかの宗派の人びとも戸隠に参るようになり、戸隠の信仰も大衆化していきました。一三世紀の終りごろ、仏教の説話を集めた

『沙石集』^{（しやくしゅう）}には、戸隠で修行中の子を招き寄せ、文を読ませたという話が収められており、富裕な家の子供たちが戸隠山へ登って学門修行していたことを伝えています。

◆飯縄権現

信濃の飯縄山^{（現在の戸隠村と牟礼村境）}には学門行者がはじめて登り、神がみの加護を受けたといわれています。以後、飯縄山は修験の山となりました。

代代千日大夫^{（せうだいせんじつだいてふ）}とよばれた修験によつて奉仕された飯縄大明神は、戸隠の鎮守であり、日本第三の天狗ともいわれ、しばしば白狐にのつた鳥天狗の姿で表わされ

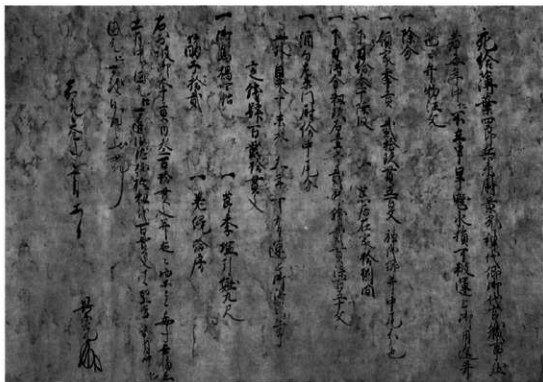


前立飯縄明神像（常安寺蔵）

上杉謙信が関兵や儀式のとき着用したと伝えられる。謙信は朱印にも飯縄明神を用いるなど熱心な信者であった。

ます。飯縄はもともと戸隠と一体であったのですが、室町時代には「飯縄の法」が武士の信仰を集めるようになり、飯縄信仰は独自の発展をとげるようになりました。室町幕府の管領細川政元は、「魔法飯縄の法・愛宕の法をおこなってきながら出家山伏のようだった」といいますし、関白九条植通は、門人に「私は飯縄の法をおこなって夜半に鳶を呼び、また辻風をおこなせた」（『むしくら』）と話しています。関白や管領など、上層の人びとが飯縄の法をおこなったということは、当時の飯縄信仰の隆盛を物語っています。また飯縄明神は、戦国時代の多くの武将にも注目され、上杉謙信や武田信玄も熱心な信者だったので。（伊藤千子）

銭や焼物の流通



銭や特産物を薩摩国まで送ったことがわかる古文書（島津家文書 東京大学史料編纂所蔵 複製）

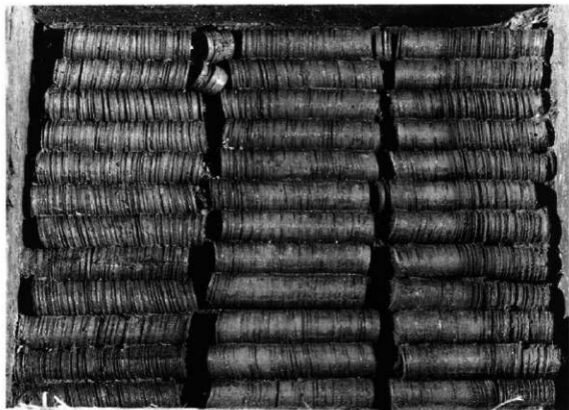
◆太田荘と地頭島津氏

承久三年（一二二一）、鎌倉幕府は惟宗忠久を太田荘（たんだら）の地頭に任命しました。惟宗氏は薩摩国（鹿児島県）に本拠をもつ御家人でしたが、島津荘の地頭でもあったことからちに島津姓を名のりました。太田荘は現在の上水内郡豊野町あたりで、もとは摂関家の荘園でした。

薩摩国とは遠く離れた太田荘を支配した島津氏でしたが、年貢として銭や特産物を薩摩国伊作荘（吹上町）の国元まで運ばせていました。嘉元三年（一一三〇五）の記録によると、太田荘からは銭のほかに、御馬揚（おまやう）（シナ布製の馬の腹がけ）や塩引鮭（しほひきいさ）・鮭子（さしこ）・差繩（さしな）（乗馬の口につけて牽く布・糸の撚り縄）が送られました。これらの輸送経路や運搬方法はよくわかっていませんが、陸路のほかに船も使われました。

◆大量の出土銭

中世の日本には中国から大量に銅銭が輸入されていました。これらの銅銭は輸入されたあと、どのように流通していったのでしょうか。

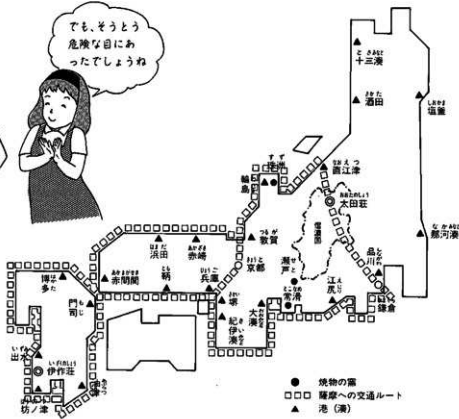


西条・岩船遺跡から出土した大量の銭(中野市教育委員会蔵)

地中から掘り出される大量の出土銭が、ひとつの手がかりを示してくれます。全国的には一か所で二〇万枚もの銭が出土した例もあります。銭の多くはがんじょうな箱ないしは甕や壺に密封されて埋められています。銭は一〇〇枚くらいの単位で紐に通した「さし銭」の状態です。

ではだれがどうして大量の銭を地中に埋めたのでしょうか。じつはまだよくわかっていません。武士が戦乱から銭を守るために安全な場所にかくしておいたのか、寺院や商人が貸し借りに使う銭を盗まれないように貯えておいたとか、庶民が神仏に銭をささげたものであるといった、いくつかの説が発表されています。

長野県は、全国的に大量出土の件数の多いところです。そのなかから長野県内での最近の出土例をひとつ紹介しましょう。一九八九年と九五年度の二度、中野市の西条・岩船遺跡で大量の銅銭が出土しました。八九年の発掘で出土した銭は、ひとつの木箱に「さし銭」の状態で約三万七〇〇枚が収まっていました。九五年の発掘で出土した銭は、珠洲焼(石川県珠洲市で焼かれた陶器)のひとつの甕に、やはり四万枚近く収まっていました。出土した銭のほとんどが中国の宋の時代



(一) 一世紀から一三世紀ころ)につくられたものです。木箱と甕の出土位置は、わずか数メートルはなれていただけでした。

こうしたことから、大量の銭が北信濃にもたらされて使われていたことがわかりますし、物の流通も活発であったことも予想できます。いつごろ、だれがどんな目的で地中に銭を埋めたのかについては、やがて明らかにされることでしょう。

◆焼き物の流通

常滑焼(愛知県)・瀬戸焼(愛知県)・珠洲焼(石川県)といった遠い地方で生産された陶器が信濃の各地で使われていました。このことは、日本の広い範囲で物の売買や輸送がさかんにおこなわれていたことの証です。常滑焼と瀬戸焼はおもに中・南信地方で使われていましたし、珠洲焼は北信地方で使われていました。代表的な例として、中信の松本市で出土した常滑焼の壺と北信の飯山市で出土した珠洲焼の壺を写真で紹介してあります。

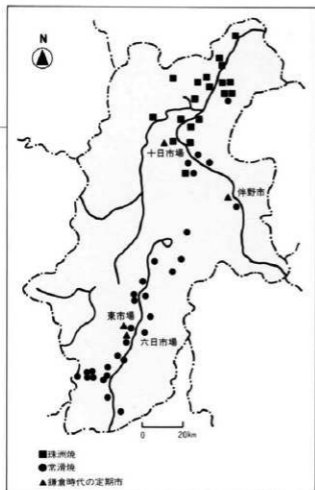
信濃各地で市が立ち、陶器をはじめさまざまな物資が売買されたことでしょう。人や物の移動は、歩いたり馬に乗ったりするのがふつうでしたが、重い物資を大



200号
 常滑(愛知県)産の陶器
 松本市北栗遺跡出土(長野県立歴史館蔵)



75号
 珠洲(石川県)産の陶器
 飯山市長者清水遺跡出土(飯山市教育委員会蔵)



010号
 珠洲焼・常滑焼の出土地(桐原健「中世信濃における大量のあり方」より)と鎌倉時代の定期市の分布

量に運ぶ手段として船が使われました。海の道、川の道が中世のころには開けていたのです。能登半島先端の珠洲焼が信濃に運ばれるには、日本海と千曲川などが、常滑焼と瀬戸焼の運搬には天竜川が利用されたと考えられます。信濃は日本海側と太平洋側との物資のまじわるどころだったといえます。

(樋口和雄)

さらわれた善光寺如来

◆戦国大名と善光寺

甲斐(山梨県)の武田信玄と越後(新潟県)の上杉謙信とが戦った川中島の合戦は、善光寺の本尊をごちらが手に入れるかという戦いでもありました。善光寺如来のご利益にあやかろうとする善光寺信仰は、全国的に広がっていましたから、戦国大名にとっては、善光寺の本尊(如来)をわが物にすることは民衆の心をとらえるうえで大事なことだったのです。武田信玄とむすこの勝頼が、信濃の諏訪社を保護して人心をまどめようとしたことなどもそのあらわれのひとつです。

弘治元年(一五五五)、上杉謙信は北信濃からいったん越後へ兵を引いたとき、善光寺の如来をはじめいくつもの仏具を直江津(上越市)へ持ち帰ったと伝えられています。このとき如来堂を建てて安置したのが越後の新善光寺の始まりだったといわれています。いっぽう武田信玄は、やはり善光寺の如来像や梵鐘・仏具などを甲斐の甲府へ持ち帰って甲府善光寺を建てました。おたがいに善光寺信仰

を政治的にも利用したかったのでしょう。

◆さまざま善光寺如来

武田氏は上杉氏を越後へ追いやって信濃のほぼ全域を支配しました。これまで信濃善光寺の別当(管理者)であった栗田氏は、信玄の命令で甲府善光寺の支配を任せられました。大勢の僧侶たちも甲府に移りました。こうして信濃善光寺の機能はすっかり失われ、甲府善光寺にとつかわられてしまいました。

天正一〇年(一五八二)、織田信長が信濃に攻め込んできて武田氏を滅ぼしました。信濃・甲斐にまで勢力を広げた織田氏は、甲府善光寺の如来を岐阜に移して岐阜善光寺を建立しました。この年の夏、織田信長は家臣の明智光秀によって京都の本能寺で討たれてしまいます。このため、また別の戦国大名が善光寺如来をねらうことになったのです。

徳川家康は織田氏が管理していた善光寺如来を、いったん自分の本拠地である遠江(静岡県)へ移しました。わずか半年ばかりそこにとどまっていた如来は、家康の意志によって

甲府の善光寺にもどされました。如来が家康の枕元にたつて、甲府へ帰りたいと告げたことから実現したといわれています。

◆信濃におちつく善光寺如来

このころ徳川家康よりも強い権力をもっていたのが、自らを天下人とよんだ豊臣秀吉でした。織田信長が討たれたあと、秀吉は信長の有力家臣を追い落としてはい上がってきたのでした。かつては信長の家臣であった家康も、すでに秀吉の家臣になっていました。

慶長二年(一五九七)のことです。太閤という最高の位にいた秀吉は、自分が建てさせた京都の方広寺へ、大仏の代わりに甲府善光寺の如来を迎え入れました。徳川家康の手から、時の最高権力者である豊臣秀吉の手へと如来は移ったのです。ですが、よくないことがつづいたことから、まもなく秀吉は如来を古奥の信濃へ返すことにしました。

信濃からはなれて四〇年もの長いあいだ各地を流転した善光寺如来は、ようやく信濃善光寺にもどされました。秀吉の死後、徳川家康が幕府政治をおこないましたが、信濃善光寺には一〇〇〇石の領知を与えて保護しつづけてきました。

(樋口和雄)

協力者のみなさん (五十音順、敬称略)

青木安雄

飯山市教育委員会

石井 進

上田市立信濃国分寺資料館

永福寺 (大分県)

神奈川県立金沢文庫

河出書房新社

歎喜光寺 (京都府)

願行寺 (上田市)

喜多院 (埼玉県)

京都国立博物館

黒坂周平

玄応社

金台寺 (佐久市)

(財) 美術館

真田宝物館 (長野市)

穴戸征四郎

清浄光寺 (神奈川県)

常安寺 (新潟県)

常称寺 (広島県)

真光寺 (兵庫県)

善光寺大勧進

善光寺大本願

善光寺事務局

高野 修

竹中大工道具館

辰野町教育委員会

中央公論社

長泉寺 (戸倉町)

帝京大学山梨文化財研究所

東京大学史料編纂所

戸隠村観光協会

中野市教育委員会

長野市誌編さん室

長野市役所観光課

長野市立博物館

長野市埋蔵文化財センター

西田源一

日本常民文化研究所

根津美術館 (東京都)

フジアート出版

藤沢市教育委員会博物館建設準備担当

普門院 (辰野町)

平凡社

藤井恵介

萬福寺 (島根県)

和歌山県立博物館

あとがき

長野県立歴史館では、毎年一冊ずつ、テーマを決めてブックレットを発行しています。

三冊めのこの本は、中世の信濃の歴史について、小学生や中学生のみなさんにも興味をもつて読んでもらえるようにと企画・編集したものです。とくに善光寺の歴史をとりあげて、人びとがどのように生きてきたかについてくわしくふれてみました。

本書を参考にしてもっと深く歴史を勉強してみたいというみなさんは、ぜひ何回でも歴史館に来てください。歴史館には、歴史の図書がそろっていますし、中世善光寺の復原もしてあります。専門の職員がみなさんの質問にお答えもします。

本書のために、貴重な写真や資料などをこころよくご提供くださった多くの方がたに、あつくお礼を申し上げます。

一九九七年三月

長野県立歴史館

編集・執筆

伊藤 羊子
井原今朝男
傳田伊史
樋口和雄
福島正樹

利用案内

(開館時間)

午前九時～午後五時

(ただし、入館時間は午後四時三〇分まで)

(休館日)

月曜日(祝日・振替休日)に当たるときは火曜日

祝日の翌日(日曜日にあたるときは開館)

十二月二十八日～一月三日

(常設展覧料)

一般 高校・大学生 小・中学生

個人 三〇〇円/一五〇円/七〇円

団体 二〇〇円/一〇〇円/五〇円

(団体二〇名以上)

県内の小・中・高校生が、学校の教育活動として観覧するとき、および身体障害者手帳等の交付を受けている方は、減免になります。

(交通案内)

信越本線歴代駅から徒歩二五分

長野電鉄河東線東屋代駅から徒歩二〇分

長野自動車道更埴ICから車五分

高速道路バス停「上信越道屋代」より徒歩三分



長野県立歴史館

信濃の風土と歴史③ 中世の信濃

一九九七年(平成九年)年三月三十日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒三八七 長野県更埴市屋代清水二六〇一六

長野の歴史史公園内

電話 〇二六―二七四―二〇〇〇(代)

FAX 〇二六―二七四―三九九六

印刷 信長書籍印刷株式会社



森將軍塚古墳之長野県立歴史館